



障害児保育の成立と進展：留萌かもめ幼稚園の実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川分校障害児教育研究室 公開日: 2017-07-25 キーワード: 作成者: 有田, 素子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007695

障害児保育の成立と進展

——留萌かもめ幼稚園の実践——

有 田 素 子*

北海道留萌市にあるかもめ幼稚園は、昭和32年開園と同時に障害児を受け入れ、北海道における障害児保育の草分け的存在といわれる。漁業中心のしかも閉鎖的ともいえるこの地に、なぜ早い時期から障害児保育が生まれ存続してきたのだろうか。27年間にもおよぶ実践を通し、その成立過程・保育内容の変遷をたどることによってこれから障害児保育を手掛けようとする地域、あるいはその保育に携わっている人達に対して重要な示唆を与え得ると考え、延べ10数回にわたる訪問面接調査および障害児保育実践の参加観察を行った。

かもめ幼稚園の障害児受け入れは意図的かつ組織的なものではなく、偶然障害児が入園したことがきっかけであった。当初の保育はオープン方式で、園児40名教師4名と人的条件には恵まれていたが、障害児の指導方法もわからぬままのスタートで、毎日がその子中心の保育のようなものであった。翌年からは増設に伴い横割りのクラス編成となり、障害児は各クラスに在籍、一斉保育に支障があると思われる場合には個別指導を加味した。

昭和52年「つくし学級」という特別な学級を設置し、障害児をそこに在籍させ個別指導中心の特殊学級の役割を持たせたが、いくつかの問題点があり1年後には廃止した。経過の反省の中から障害児を再び各クラスに在籍させ、つくしの部屋は個別指導の場として、また自由遊び時は誰もが入って遊べる部屋として利用されている。

現在、障害児は自由遊び時も一斉保育時も原則として健常児とともに過ごしており、子どものその日の状態によって自由遊び時は集団に参加させても一斉保育時には個別指導をするなど、臨機応変に対応している。障害児の入るクラスは複担制をとっており、教師達は努力と協力を惜しまず、より適した指導方法を求めて日々研さんを積んでいる。この障害児保育を支える地域的な諸条件も数多くあり、それらについても考察をした。

1. 目 的

この研究は、北海道における障害児保育の草分けともいえる留萌かもめ幼稚園の27年間にわたる実践から、成立過程および進展の様子を捉え、またその保育内容の変遷をたどることにより、第1に他の地域で新たに障害児保育を手掛けようとする試みに何らかの示唆を与え得る、第2にこれから障害児保育に携わろうとする人、あるいは現在携わっている人達に、より適切な指導方法を提供するとともにその方向性を探り出すべしを与えることができることを考え、計画された。

漁業中心のしかもどちらかといえば閉鎖的ともいえるこの地で、なぜ早い時期から障害児保育が生まれ存続してきたのかを、園と地域社会との関わりや人間関係の中から、その精神的・物的背景に焦点を置いて設立当時から現在までの受け入れ体制、保育の中でどこに問題点を見出しどのように指導方法を変えていったかなどを、その実践の中から捉えていきたいと考える。

2. 方 法

調査は面接法と参加観察からなる。面接は主にかもめ幼稚園園長・神カシゲ先生および障害児専任教師4名で、昭和59年6月より同年11月にかけて延べ10数回行った。参加観察は、障害児と健常児の行動上の関わり、彼らと

教師との関わりについて、これも10数回行った。

3. 調 査 結 果

(1) 障害児保育の誕生

かもめ幼稚園は、昭和32年神力シゲ(現園長)が設置者となり金沢豊三を園長として「次代を担う青少年の育成は幼児教育こそ鍵である」という信念のもとにスタートした。最初は3歳児から5歳児まで40名の園児に対して4名の教師で保育が開始された。

開園と同時に障害児の受け入れは最初から意図的および組織的になされたものではなく、偶然3名の障害児が入園してきたことがきっかけであった。幼稚園を開園した以上はどのような子でも受け入れるつもりでいたが、当時は障害児という言葉さえなく、障害児のほとんどは家庭の中で隠すように育てられた時代であり、したがって保育内容や指導方法についても障害児のためのものはまったく準備されていなかったが、とにかく一人ひとりの子にとって楽しい幼稚園生活を与えようという願いから、徐々に障害児への具体的配慮が生まれてきた。

この時の3名の障害児は、言語障害1名と精神薄弱2名で、この2名のうち1名は障害の程度も軽い子だったが、もう一人は重度の精神薄弱児で多動・他傷行為の激しい子だった。だが、その子の家が園に近く近所の子と同じ幼稚園に通うことが自然なことであるし、何よりも当時の保育者が全員既婚者ということもあり、入園の際

* 北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程

の面接で「なんとか友達を作ってあげたい」という母親の希望を全職員が理解して、入園を許可したのであった。

入園決定後その子のかかりつけの医師、保健所と相談を行い面接時の様子を専門家に伝え意見を求めたところ「集団生活は無理だ」と判定されたが「受け入れた以上はやるだけやってみよう」と保育を開始した。この幼稚園はもともと子どもにとって楽しい遊び場になってくれればよいという思いで開園したので、何かを教え込む、指導するといった考えがなかったことが、障害児の受け入れ拒否につながらなかったともいえるだろう。しかし、暗中模索の状態での保育では不安も大きく「今考えると冒険のようだった」と神力園長は語っている。

開園時の園児40名に対し教師4名という好条件も、障害児保育を可能にした要因である。3, 4, 5歳児に各1名教師につき1名が障害児を担当、全園児を1クラスで保育するオープン方式の形がとられた。人的条件は充分だったが指導方法はわからない状態だったので、障害児を中心に模索的保育を行っていたようなものであった。

結果的にその子は入園1年後親の都合で退園し施設へ移ったが、その時の取り組みはその後の障害児保育の展開に大きな方向づけをなした。そして、それは統合保育の意義を確認させると同時に、障害児に対する個別的な働きかけの必要性をも感じさせ、この園でのその後の障害児保育を実施する上での実践的な柱、たとえば複数担任制の導入、子どもの状態や場面に応じた個別指導、プレイルームの設置へと進展していったのである。

開園翌年の昭和33年からは2クラス増設に伴い横割りのクラス編成とし、障害児は各クラスに在籍、一斉保育の際保育に支障があると思われる場合、園長の自宅などで個別指導を行った。昭和50年の新園舎増設に伴い7クラスになるまで、障害児保育はこのような形態で展開されていった。

(2) つくし学級

昭和52年、国からの補助金で「つくし学級」を設置、障害児をそこに在籍させ、個別指導中心の特殊学級の役割を持たせた。この学級設置のねらいは、障害児に対して個別指導を充分に行うことはもちろんのこと、その母親に対しても、同じ悩みを話し合い理解し合う場を持つことで母親を解放し成長させることにはないかという配慮からであった。そして「つくし学級」設置の翌年9月に障害児の父母の自主運営による「つくし父母の会(つくし会)」が設立され、毎月会報を出したり話し合いの場を持つことによって、親達の障害児への配慮も充分なものとなってきた。

しかし、このように障害児の親同士のつながりが強くなってきた反面、かもめ幼稚園の父兄全体の中からはこのグループが孤立する傾向が目立ってきた。また、当時は障害児用の玄関を設置していたため、障害児を持つあ

る母親から「うちの子が、他の子達と別の玄関から出入りするのを見るのはあまりいい気持ちがない」という声があがり、職員達は「無意識のうちに障害児と健常児を分けて考えていたのではないかと反省し、「つくし学級」を約1年間で廃止した。現在は障害児をすべてのクラスに在籍させ、すべての生活の場を健常児と同じにする統合保育を実施している。

「つくし学級」の保育室は現在「つくしの部屋」として幼児の興味を惹きそうな遊具を数多く置き、自由遊び時にはすべての子どもが遊べる部屋として、また一斉保育時は障害児の個別指導の場所として利用している。

以上、かもめ幼稚園の障害児保育の主な歩みを述べてきたが、これまでの実践を回顧して園長は「一人ひとり子どもを尊重し肩を張らず構えずに自然に行ってきた」と語っている。

(3) 家族的な園から事業としての園へ

創立当時園児の父兄は、開園して間もないかもめ幼稚園の環境や設備の整備に自主的かつ積極的に協力した。園長は当時の様子を「開園当初の父兄は素晴らしい人達ばかりで、この幼稚園はみんなで創り上げた幼稚園という感じがする」と話している。

当時は地域住民のつながりが強く、どこの家にはどんな子がいるとか、あの家はこんなことで困っているなどの事情を地域の住民が理解し、父兄というよりも地域ぐるみの協力が得られたのである。そのため、その父兄達の心の中には障害があろうとなかろうとどの子もみんな同じという気持ちが強くあり、特に園からの働きかけがなくとも親同士励まし合い、子どもはみんなで育てるといような関係が育っていたのではないだろうか。

しかし、園と保護者とのこのような家族的なつながりは、昭和50年それまで個人立だった幼稚園が法人立となった頃を境として大きな変化をみせた。みんなで創った幼稚園から一歩離れた事業としての幼稚園となり、保護者の中には保育料を払っているのだからそれだけのことをするのはあたり前という考え方をする者が現れはじめた。

また「言葉の遅れている子と一緒にいると、うちの子も話せなくなるのではないかと」という偏見に満ちた声も赤裸々に聞こえるようになった。しかしそれに対し園長は「障害児は障害児なりに素晴らしいものを持っている。もしどうしてもいやならば他の園へ行かれてはどうか」と話した。しかし、結局これまでこうしたことで退園した例はない。実践を進めるうちに障害児の親子の姿を見て、他の親も徐々に理解を深めてくるようになっていくのである。

昭和52年「つくし学級」設置の頃、教師の障害児保育に対する考え方にも変化がみられてきた。つまり、今まではどの子も同様に受け入れ、それを自然な形で続けてきたものが、この子が入ってきたためにこのような保育

をしなければならないというように、やや義務的な色合いが濃くなってきたのである。

このような人の心の移り変わりについて、園長は「法人化されて合理的になり便利な面も多くあるが、何か大切なものが失われたような気がする」と語っているが、この変化はひょっとすると、当時の日本社会全体に浸透した変化と同一のものではないかと思う。

(4) 受け入れ児の推移

表 1. 各年度の障害児在籍数 (主障害別)

障害 年度	精神薄弱	言語障害	情緒障害	肢体不自由	病弱	聴力障害	視力障害	
32	2	1						3
33	3	1						4
34	3	1			1			5
35	1							1
36	1							1
37	1	1						2
38	2	2						4
39	2	1		1				4
40	1	2		1	1			5
41	1	2						3
42								0
43	1							1
44								0
45				1				1
46								0
47	2							2
48	1		1					2
49	1	1						2
50		1						1
51	1	4						5
52	3	4	2			1		10
53	2	4	4			1		11
54	1	7	4		1			13
55	2	2	4	2	1			11
56	1	6	3		1			11
57	2	2	4	2	1			11
58	1	2	2	3	1			9
59	1	2	4	1	1		1	10
計	36	46	28	11	9	1	1	132

表 1 が示すように昭和30年代の受け入れ障害児はほとんどが精神薄弱で、その発達が遅れていても保育の中で成長していく子が多かった。しかし、昭和48年初めて情緒障害の子を受け入れて以来、昭和52年以降自閉症あるいは自閉的傾向を持つと診断される、言葉がなく、他児と行動を共にできない子が増加してきた。

障害児の両親の姿勢を、園長は「昭和30年代は子どものためなら命も惜しくはないという感じの母親が多く、また父親もでき得限りの協力を惜しまず、とにかく一生懸命な気持ちが伝わってきたが、

昭和50年以降受け入れた障害児の母親は、十分に力をそそいでいる母親はもちろんいるが、どちらかといえば無口で育児能力に欠けているかまたは子どもに対して口を出し過ぎるかの両極端の人が増え、中でも特徴的なのは父親の協力がまったく無いに等しい状態が目立ってきたことだ」と言っている。

(5) 現在の状況

かもめ幼稚園は現在、保育室 8 室と遊戯室があり、クラス編成は 3 歳児 1 クラス、4 歳児 2 クラス、5 歳児 4 クラスの計 7 クラス、園児数は定員 240 名で現在 258 名、昭和59年度の障害児在籍数は10名で、彼らは各クラスに在籍している。職員は15名、障害児専任教師 4 名を含む12名が保育者であり、障害児の入るクラスは複担制をとっている。自由遊び時も一斉保育時も原則として障害児は健常児と共に過ごし、子どものその日の状態により、自由遊び時は集団の中へ入れても一斉保育時には「つく

しの部屋」で個別指導を行うなど、臨機応変に対応している。

健常児、障害児を問わず、すべての幼児に保育の場を与えることが保育の原点であるという園方針のもとに、障害児、健常児が共に育つ保育をめざし、日々の実践の中で教師と父母が学びあい、子ども達の幸せを願うものであり、それは園の運営方法、保育計画に則って行われているのである。(表 2-1、表 2-2)

表 2-1 運営方法

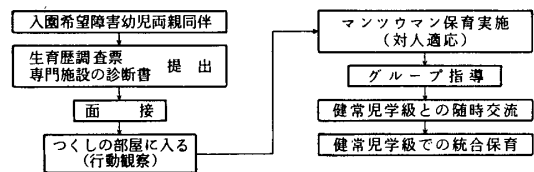


表 2-2 自閉児の保育計画 (2年間)

一 年	(入園当初)	○ラポートをつける。禁止や制限からの解放。
	(1 学期前半)	○あるがままの姿を受け入れ、生活の場を見い出せるように援助する。
	(1 学期後半)	○興味・関心事をみつけ、思いきり行動させながら、集団に関心の目を向けるように働きかける。
二 年	(2,3 学期)	○集団への参加を援助する。遊びが発展するよう助ける。
	(最初の1週間)	○環境の変化を考慮し、個人的に受容し退行しないよう助ける。
	(2 週目以降)	○生活の安定するのを見て、徐々に生活習慣を身につけるように働きかける。 ○課題意識をもって、物事にとりくめるよう助ける。 ○無理のないように集団生活に入れていく。

保育内容については、個々の発達段階を考慮しながら指導計画やカリキュラムを立てるため、充分な吟味と討議を重ね個々の幼児に合わせて柔軟な姿勢をとれるよう教師全員で話し合うことを大原則としている。

4 歳児の時点ではいろいろな経験をさせることに重点を置き、健常児と同じことをさせることにあまりこだわらず、5 歳児になってから健常児と同じことをさせ、その子の成長の度合を考えながら次の保育に結びつけるような指導を考えている。教材は自らの研究と創意によるもので、題材を選ぶ場合には基本的に健常児と同じものを与えている。

障害児の指導方法、特に自閉的傾向を持つ子の指導については、園内でのケース検討や勉強会のみならず、園長はじめ教師が一体となって各研究会への参加・見学などを行っており、職員の研修の機会が多い。地元での研修団体として重要なものに「もえの会」がある。

(6) 「もえの会」の誕生

「障害をもつ子どもへのかかわりを考える'83もえの会 (通称もえの会)」は「どんな立場の人も人間である限りは子どもとのかかわりが必ずある。子どもの自立する姿を見守り、援助していくため、異なる眼、異なる考えを持つ人が肩書き抜きで集まり、共に悩み共に考え多面

的に話し合おう」 — というのが発会の原点である。

これは、旭川市にある「障害児保育を語る会」と同様な会をつくろうと、かもめ幼稚園園長・神力シゲ先生が呼びかけたことが契機となり、昭和58年、留萌市に発足したものである。

会の運営は年4回、かもめ幼稚園を事務局として、留萌地区の保健婦・保母・言語治療教室の教師・行政関係者などが集まり、毎回障害児の事例研究発表を通して、各分野の人達のさまざまな意見が活発にかわされている。特に、ケースに対する幼稚園・保健所・言語治療教室3者からの活発な意見のやり取りによって、個人の問題点をより明らかにし適切な指導を行おうとするため真剣さも増し、重要な情報交換の場となってきている。この会は、留萌の障害児の自発的な研究団体として常に新しい自主的な方向性を見い出そうとしており、これからの活動が楽しみなところである。

4. 考 察

かもめ幼稚園の障害児の受け入れから現在までの存続を支えた条件を考えてみた場合、次の4点があげられる。

第1は、留萌という地域性である。寒冷地、漁業中心、父親不在の時期が長いからこそ必然的に地域住民は助け合い、協力しながら生きているため、住民間のつながりが密になり、心理的共同体としての地域社会がつけられた。そんな中でたとえ障害児がいたとしても、特別視することなく自然に受けとめてきた。昭和32年かもめ幼稚園の開園に伴い、このような地域住民に培われてきた協力体制がそのまま園に対しても現れたと言っても過言ではなく、昭和50年、園が法人立になったあたりから考え方に大きな変化が起きたものの、既にそれまでのつながりが地域社会に根ざした園として、留萌市におけるかもめ幼稚園の存在を不動のものにしてきていたのである。

第2は、園長の教育方針および人間性である。幼稚園は楽しい所、子ども達を自由にのびのびと育てたいとするその気持ちは、園児のみならず他職員に対する姿勢にも現れている。彼女の構えずにそして相手を包み込むような豊かな人間性に、教師、父兄らの信頼は厚く、この長年にわたる障害児保育の進展は、園長、職員、父兄のチームワークのたまものといえよう。

第3に、保育の変遷をたどることによって浮かび上がってきたのは、この園の保育方法の工夫である。開園当初より20年間は障害児を各クラスに在籍させ、その子の状態が悪ければ隣接している園長の自宅で個別指導がなされた。一斉保育時に健常児と共に過ごすことが無理ならばと、昭和52年「つくし学級」設置によって障害児のみを一室に集合しての保育となったわけであるが、これは同学級の父母の結びつきを強くはしたものの、園の父

兄全体からは孤立する傾向を促進した。職員の反省の中から生まれてきたものは、障害児の在籍と生活の場を健常児クラスに戻すことであり、同時につくしの部屋を個人指導の場とした現在の保育方法である。この流れを見ると、統合保育の形態を取りながら個人指導を入れていくという最も革新的な指導方法が採用されているのである。

第4に、障害児に対する知識もないままに障害児を受け入れ、試行錯誤のくり返しの中で、非常に柔軟性のある保育が一貫して続けられていることも、注目したい点である。この場合、ただ対象児を見ているだけではなく、指導者自身の創意工夫の心、そして何よりも求めよう、学ぼうとする向上心と根気が大切なのである。

今後の課題としては、保育現場における障害児と健常児の関係、そして個人指導および統合保育のあり方のより詳しい検討ということがあげられよう。

統合保育の目的として、障害児と健常児が互いに助け合い認め合う関係の形成が考えられるが、ややもすると健常児の障害児に対する保護的な関係が強調される傾向がみられ、それは障害児の自立を育てる上でマイナスに影響することが多い。障害児と健常児双方にとってのよりよい関係を求める上で、園長が「指導法の確立は理論以上に実践から」と述べているように、今後とも数多くのケース研究と粘り強い実践を通して実情に合った障害児保育を展開し続けていってほしいものである。

留萌市における障害児保育は、かもめ幼稚園の取り組み以外に特別な動きはこれまでなかった。障害児保育を広めるためにも行政や他機関からの積極的な取り組みが欠かせないことだが、この点については、園長自身将来この幼稚園に付設して障害児の相談所、いわばセンター的役割を持つ機関を設置するという構想も具体化しつつあり、これからの動向が注目される。

(注) かもめ幼稚園は、昭和58年10月13日「北海道情緒障害教育研究会・名寄大会」ならびに、昭和59年7月26日「第27回北海道私立幼稚園教育研究大会・旭川大会」において、「自閉児の指導と日常保育の反省」という実践研究を発表した。

本研究をすすめるにあたり、資料提供、参加観察および面接などを快諾し、いろいろと御指導、御協力いただきました。留萌かもめ幼稚園園長・神力シゲ先生はじめ諸先生、園児の皆さん、「もえの会」の方々、そして励ましの声をかけてくださった沢山の方々に、心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 坂口敏之：障害児保育の成立、存続、進展の諸条件に関する考察，道教大旭川分校学士論文，1983.
- 2) 神力シゲ：自閉児の指導と日常保育の反省，留萌かもめ幼稚園，1984.